

課題部門：(テーマ)微笑ましい情景

タイトル：日常

作者：現代ビジネス学部国際観光ビジネス学科 遊佐帆香

日常。外が薄暗くなってくる頃。

どたばたと足音が聞こえてきたと思ったら勢いよく玄関のドアが開けられる。

「ただいま！あのね、今日ね…」と帰って来るや否や夢中になって話を始めるこの少年。この少年が私の10歳年の離れた弟。私の日常に「微笑ましき」を提供してくる張本人。「あのね、今日ね…」の続きとともに、この少年との日常を少しばかりお話ししたい。

「あのね、今日ね、友達できた！」

「ずっとうしろついてくるんだよね。何も言わずに！」

首をひねった。小学生の友達が会話をすることなく、黙って後ろをついてくる？

「でも可愛い！黒くて、首輪してて、鈴もついでる。」

なるほど。ねこだ。この少年は純粋にねこを友達として認めていた。

帰りがいつもより少し遅かったことを考えると、きっとしゃがみこんで目線を合わせ、友人の歩く歩幅に合わせて一緒に帰ってきたのだろう。

そんなことを想像しながら少年の話に耳を傾ける夕方18時半。

月曜、朝7時。この日の大学の講義は午後からで、あと30分は眠ることができる。

が、なにやら隣に気配とぬくもりを感じる。

目を開けると、制服を着て準備万端な少年が横で寝ころびながら私を観察していた。目が合った途端、少年は勝ち誇った表情を浮かべて一言。

「ねぼすけ」

こうして私の月曜日が、予定よりも早く幕を開けることになる。

食パンの耳だけきれいに残されたお皿が目に入る。残骸を片付けながら、ふとキッチン窓を覗くと、駆け出す少年の姿が目に入った。いってらっしゃい、と思わず呟いてしまうのは少年の無邪気さのせいだと思う。

休日。少年は必ず私をカードゲームに誘う。

無論、女子大生の私が初めからこのカードゲームの熟練者だったわけではない。

まさか自分がこの歳でカードゲームに夢中になるとは思っていなかった。

遊び方も楽しみ方も、すべて一からこの少年に教わった。今ではこの少年と対等に勝負できるくらいになってしまった。

カードゲームだけではない。名前だけは聞いたことがある、そんな流行りのアニメや漫画も教わった。

驚いたことに私は彼に教わったそれらに高確率で夢中になる。

そうすると、私は彼と過ごす時間が必然的に増える。二人で遊んで、二人で鑑賞して、二

人で楽しんで、笑いあう。

そんな姿を見てからか、母は常に私に感謝を伝えてくる。

正直、姉として面倒を見てあげている感情はあまり抱いていない。

むしろ、私の方こそもらっているものが多いのだから。

少しでも揺らせば音を立てて崩れてしまいそうになっていた一年前。

気持ちも、実力も、上を向くことができない苦しさや息苦しくなるような空気感を背負いながら少年を見ていると、少し苛立っていた自分の姿を思い出す。

あの時は大人気もなく、ひどく弟がうらやましかった。

今年、ふと弟の世界観を味わいたいと思うようになった。私にもこのような時代があったのかな、と少し気になったのもあった。

少しずつ、弟の話に耳を傾けるようになった。毎日、心が温かくなれる気がした。

大学生になった私が、小学校高学年になった弟から今多くのことに気づかされている。

こんなにもまっすぐで一生懸命で、毎日が全力だった時が本当に私にもあったのだろうか。

そんな弟という存在の近くにいられること。これはきっと宝物にしなければならないし、何よりも大切にしたいと心から思っている。

数年たてばきっとこんな弟の姿は見られなくなる。こんな日常があったことも、もしかしたら忘れてしまうのかもしれない。

寂しさはある。でも、一瞬のひと時だからこそ、より微笑まशीいと、より大事にしようと思えるのかもしれない。きっとそうだと思う。

私の弟へ

いつもいろんな楽しいことを教えてくれてありがとう。一緒に今を大切にしていって、これからもたくさんのことを教えてね。